

## 徒然草

### 中東開銀移行チームの残り香 そして繋いでゆく、仲間の努力を称える言葉

福田幸正  
SRID 会員

1993年9月にイスラエルとPLOとの間で交わされたパレスチナ暫定自治合意（オスロ合意）を契機に、中東和平プロセスは一気に盛り上がりを見せた。その機運に乗って、アジア開発銀行やアフリカ開発銀行のような地域開発銀行（MDBs）が唯一存在しない中東・北アフリカ地域に、平和、安定及び開発を強化・促進することを目的にした銀行（正式名称：中東・北アフリカ経済協力開発銀行〔通称：中東開銀/MENABANK〕）を設立する動きが活発化した。その流れを始動させたのは、イスラエル、パレスチナ、エジプト、ヨルダンの中東4カ国であり、米国がその動きを積極的に支援した。まず、関係国間で中東開銀の設立協定の起草協議が進められ、1996年8月に最終合意に至った。それに先立ち、主要関係国の専門家からなる設立準備チーム（Transition Team：移行チーム〔在カイロ〕）が立ち上げられることになった（1996年2月）。日本は他国に先駆けてメンバーをカイロに派遣することになったが、当時、海外経済協力基金（OECF）カイロ事務所長だった自分にお声がかかった。各国政府は、それぞれの議会での設立協定の批准手続きを行い、1997年7月、ここでも日本は各国に先駆けて批准を完了した<sup>1</sup>。

最盛期の移行チームの構成は次のとおりである（8カ国、12名）。

団長：米国（元駐オマーン米国大使）、副団長：日本（OECF）、オランダ（財務省）、エジプト（世銀）、イスラエル（中銀）、イタリア（世銀）、カナダ（コンサルタント）、ヨルダン（計画・国際協力省）、米国（財務省）、米国（コンサルタント）、エジプト（エジプト外務省から派遣された秘書2名）

移行チームは、取り巻く中東情勢が刻一刻と悪化する中での活動を余儀なくされたが、中東開銀設立のために基本となる各種文書（組織構成、総務会・理事会規約、本部協定、職員採用基準、金融業務・財務・会計基本政策等）をドラフトし、関係各国政府に提出して1998年末にその任務を終えた。移行チームの任務終了は、イスラエルとパレスチナの関係が悪化し、その影響を受けて米国政府の関連予算法案が三年度（97、98、99年度）連続して議会で否決されたことによる。中東開銀の設立を主導し、最大の拠出国と

---

<sup>1</sup> 中東開銀の設立の経緯についてはパレスチナの視点から書かれた次の論考が詳しい。著者は当時の中東開銀設立にかかわるパレスチナ交渉団代表（前パレスチナ自治政府首相）。Shtayyeh, Mohammad. 1998, *The Politics of the Middle East Development Bank*. Palestine: PCRC.

米国の視点から書かれたものでは、脚注2の(Dunford 2019)の6. CAIRO: Banking on Peace (pp. 129-155.) が詳しい。

なるはずだった米国政府は、状況が好転するまで中東開銀設立努力を棚上げにした。

移行チームの任務終了に伴い、その事務所も閉鎖されることになった。任務終了が決まるやにわかに事務所の中が浮足立ってきたある日、こまごまとした残務処理をしていると、決してお互いに言葉を交わすことがなかったイスラエルとヨルダン（西岸の出身）のメンバーが、入れ代わり立ち代わり自分の部屋にやってきた。そして、奇しくも同じねぎらいと別れの言葉を残して出ていった。

それから間もなくして、副団長として最後までカイロに残った自分は、一人撤収作業を行った。移行チームの3年間分の文書を整理し、全ファイルを段ボール箱に詰め封印し、ホスト国のエジプト政府に目録とともに引き渡した。そして事務所を掃き清め、最後に鍵を閉めて引き払った。一足先に帰国していた団長へのお別れのメッセージは次の言葉で結んだ。

“It’s been a pleasure serving you, sir.”

日本に帰国したのは1998年12月24日。OECFカイロ事務所勤務を含めると、6年ぶりの帰国だった。バブル崩壊でさぞさみしいクリスマスイブと思いきや、東京の夜は意外と華やいていた。



移行チームの仲間たちとナイル川に遊ぶ  
(1997年夏)

それから21年経った2019年、当時の移行チームの米国人団長から回顧録<sup>2</sup>が送られてきた。その中であつた左の写真<sup>3</sup>は、当時の在カイロ移行チームのメンバーを撮ったものである。その本の中で、米国人の団長は福田のことを次のように紹介していた。

“He was reliable, hard-working, and totally dedicated to getting the bank up and running.” (p.137)

当初の米国政府の呼びかけに応じて中東開銀設立に積極的に協力した日本、オランダ、イタリア、カナダの各政府に対するその後の米国政府の対応には冷めたものがあつたと

<sup>2</sup> Dunford, David, J. 2019. *From Sadat to Saddam: The Decline of American Diplomacy in the Middle East*. Lincoln, Nebraska: Potomac Books, An imprint of the University of Nebraska Press.

<sup>3</sup> (Dunford 2019), Fig.16. Members of MENABANK transition team enjoying a felucca ride on the Nile in the summer 1997. *From left to right*: Dick Goodman, Wafic Graiss, Daniel Yariv, Yomna Adel, Yuki Fukuda, the author, Wim Ritzerfeld, and Rania Sharif.

いわれているが<sup>4</sup>、この団長の言葉は福田に対するものというよりも、日本に対する米国としての謝辞として受け止めたい。

この写真を眺めているとつくづく思うことがある。つまり、自分自身が回顧録を発刊できるほど偉くなれなくても、だれかの書き物の中で褒めてもらえればよいということだ。それはさておき、真の評価者は、苦楽を共にした（特に苦を共にした）仕事の仲間たちであり、そして仕事の相手だ。そして、「そういえば、あの日本人、いいやつだったな〜」などと時折懐かしく思い出してもらえれば、国際開発協力に携わる者としての冥利に尽きるというものだ。それはまた日本人としての誉れでもある。

ひるがえって、途上国の人々が様々な困難に直面しながらも真剣に自立を目指しているのなら、その努力を称える言葉をかけてあげたい。それは国際開発協力に携わる者であれば、自然に口をついて出てくるはずだ。先日、ヨルダンでの仕事を終えたが、この一年間一緒に働いた（コロナもあり現地出張はせず、メールベース。Zoom の使用なし）パレスチナ系ヨルダン人の女性エンジニアに、次のはなむけの言葉を送った（前述の米国人団長の言葉を借用した）。

“I do not know how you look and how your voice sounds, but I got to know that you are a **reliable, hard-working, and totally dedicated** to the development of your country. I hope our paths will cross again.”

彼女からの返事は、「色々な意味で、今とても励ましの言葉が欲しい時だったのです」とあった。そして、どこかで聞いたことのある次の言葉で結ばれていた。

“It’s been a pleasure serving you, sir.”

ヨルダン川の川向うの西岸やガザにいる同胞に降りかかっている災禍には、日々身を切り刻まれる思いでいるのだろう。

辛くても頑張れ！

---

<sup>4</sup> (Dunford 2019), p.151